

前回私たちは、カイザリヤにおいて、パウロが総督ペリクスのもとで裁判を受けるのを見ました。ペリクスとしては、その裁判を通して、パウロのうちに明確な罪を見出さなかったわけですが、でもユダヤ人たちの手前、彼を釈放することはせず、ある程度の自由を与えつつ、牢に入れたままにしたのです。その間、パウロは、主を信じる信仰について、ペリクスとその妻ドルシラとに証をする機会を得ます。ただそれで、彼らが信仰に入った、という報告は出てきません。そのようにして、二年という歳月が過ぎるわけですが、ペリクスに代わり、新しくポルキオ・フェストが総督になることで、パウロの置かれた状況にも変化が生まれるのです。

1 節にあるように、フェストは州総督として着任すると、三日後にエルサレムに上りました。それは、現地住民の要求をじかに聞くためですが、その際に、ユダヤの指導者たちは、パウロのことを持ち出して、彼を取り調べる件について自分たちに好意を持ってくれるよう、フェストに頼むのです。そして、彼をエルサレムに呼び寄せてほしいと懇願します。彼らはなぜそのように願ったのか？その途中で、パウロを殺すためでした。

このところで私が驚いたのは、彼らの執念です。すでに二年が経っていましたが、パウロに対する彼らの憎しみ、殺意の念は、全く薄れていなかったのです。むしろ、それはもっと強くなっていたのかもしれない。ところが、フェストは、その願いを退けます。というのも、この時、彼は、エルサレムに長く滞在するつもりはなく、カイザリヤにすぐ戻る予定だったからです。そこで彼は、ユダヤ人たちに自分と一っしょにカイザリヤに下り、パウロを告訴するように告げました。そのようにして再び裁判が行われることになるのです。

7 節「パウロが出て来ると、エルサレムから下って来たユダヤ人たちは、彼を取り囲んで立ち、多くの重い罪状を申し立てたが、それを証拠立てることはできなかった」。すでに見て来たように、ユダヤ人たちが望んでいたこと、それはパウロに対する正しいさばきではなく、彼を殺すことでした。ですから、パウロを何とかして死刑に定めるために、彼らは多くの重い罪を上げるわけですが、前回と同様、何の証拠も立てることができなかったのです。それゆえに、パウロの有罪をフェストに確信させることもできませんでした。

そんなユダヤ人たちの訴えに対して、パウロはこう言います。8 節「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、またカイザルに対しても、何の罪も犯していません」。このようにパウロは無罪を主張したわけですが、いかがですか？パウロを訴えた者たちは、何の証拠もないまま、彼の死刑を求めました。一方のパウロは、自分は何の罪も犯していない、全くの潔白であると主張する。もしあなたが、この裁判をさばく立場にあったなら、この後、どうしますか？

フェストは、このようにします。9 節「ところが、ユダヤ人の歓心を買おうとしたフェストは、パウロに向かって、『あなたはエルサレムに上り、この事件について、私の前で裁判を受けることを願うか』と尋ねた」。なぜ彼は、このような提案をしたのでしょうか？エルサレムにはユダヤ議会（サンヘドリン）があるからです。つまり、この裁判を宗教に関することと判断したフェストは、どちらにしても、それをどうさばいて良いかわからなかった。それなら、ユダヤ人たちの願いをきいて、パウロをエルサレムに連れて行き、そこで裁判をした方が、彼にとっても好都合と思えたのでしょう。ユダヤ人たちに貸しを作るわけですから。

そのようにしてフェストもまた、ペリクス同様、正しいさばきではなく、自分にとって益となることを考えたのです。パウロをして、彼が二年前にエルサレムからカイザリヤに移された理由、それがユダヤ人の殺害計画のゆえであったことをフェストが知っていたかどうかはわかりません。でも少なくとも彼は、ユダヤ人たちのパウロに対する殺意は知っていたのです。この後、彼はアグリッパ王にパウロを紹介する際、こう語っています。24 節の途中「…ユダヤ人がこぞって、一刻も生かしてはおけないと呼ばわり…私に訴えて来たのは、この人のことです」。このところからも、フェストがパウロのことなど心配していないことがわかります。

当然、パウロもそのことを見抜きます。それゆえに、自分が立っているのは、ユダヤ人の法廷ではなく、カイザルの法廷であることをフェストにリマインドして、こう語るのです。10-11 節「私はカイザルの法廷に立っているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。あなたもよくご存じのとおり、私はユダヤ人にどんな悪いこともしませんでした。11 もし私が悪いことをして、死罪に当たることをしたのであれば、私は死をの

がれようとはしません。しかし、この人たちが私を訴えていることに一つも根拠がないとすれば、だれも私を彼らに引き渡すことはできません。私はカイザルに上訴します」。

私は、これまでここを読む時に、なぜパウロがカイザルに上訴したのか、その理由について真剣に考えたことがありませんでした。でも、今回このメッセージ準備を通して、パウロにはそれしか選択肢がなかったのだと思われたのです。この当時のカイザルとは、皇帝ネロだといわれますが、それが誰であれ、皇帝に上訴するというのは、勇気のいることです。でもだからといって、ユダヤ人の歓心を買おうとするフェストに身をゆだねることもできない。そういった中で、パウロはエルサレムではなく、ローマへの道を選んだのです。

このパウロのチョイスの背後には、以前、エルサレムの議会で、彼がユダヤ人たちに引き裂かれそうになった時、主がそばに立って語られた「あなたは、ローマでも証をしなければならぬ」という主のことば（約束）を信じるパウロの信仰があったと思います。もちろん、パウロ自身も、まさか「カイザルに上訴する」という方法を通してローマに行くなんてことは考えもしなかったことでしょう。でも、これがローマ行きを決定させました。というのも、陪席の者たちと協議した上で、フェストがそれを許可したからです。

ちなみに、パウロに対するフェスト自身の考えはどうであったのでしょうか？18 節と 25 節に記されています。「訴えた者たちは立ち上がりましたが、私が予期していたような犯罪についての訴えは何一つ申し立てませんでした。…25 私としては、彼は死に当たることは何一つしていないと思います」。フェストもまた、千人隊長ルシヤや前任のペリクスのように、パウロは死に当たる罪を犯していないと考えていました。にも関わらず、自分の都合を優先することで、パウロに対する正しいさばきを行わなかったのです。

でも神様は、そのことさえもご存知で、それらの状況のすべてを用いられます。つまり、主は、このような理不尽のただ中であって、パウロを通してご自身を証させ、それとともに、パウロのローマ行きを導かれるのです。実に、神様の救いのご計画とその導きは、私たちの考えや思いを遥かに超えてすばらしく、ご自身の御心を実現へと至らされます。パウロは、そのように主に導かれて、ローマへと旅立つわけですが、その前に、主はもう一度、彼を証人として用いられます。それは、今日の後半に出て来るアグリッパ王に対してです。

このアグリッパ王とは、ヘロデ・アグリッパ二世のことで、彼はカイザリヤに隣接するローマ皇帝の保護国カルキスの王でした。彼の曾祖父は、ヘロデ大王、キリストの誕生を恐れ、ベツレヘム周辺の二歳以下の男児を皆殺しにした人です。また、彼の父の叔父ヘロデ・アンテパスは、バプテスマのヨハネの首を切り、主イエスの裁判の時に、主をなぶり物にした人です。さらに、彼の父ヘロデ・アグリッパ一世は、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した人で、その最後は虫にかまれて死んだ、と 12 章で見ました。

アグリッパ王は、このような背景の持ち主ですから、フェストからパウロのことを聞いた時、興味を示さない方が無理でした。特に、フェストが語った言葉が、アグリッパの心を捕らえたと思うのです。18-19 節「訴えた者たちは立ち上がりましたが、私が予期していたような犯罪についての訴えは何一つ申し立てませんでした。19 ただ、彼と言い争っている点は、彼ら自身の宗教に関することであり、また、死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きているとパウロは主張しているのです」。

今日見た箇所には、パウロ自身が「イエスが生きている」と主張しているところはありません。でも、フェストがこう言う、ということは、確かに彼はそのことをパウロから聞いたのでしょう。ここで心に留めたいのは、パウロが「死んでしまったイエスがよみがえった」ではなく、「生きている」と主張しているところです。つまり、主イエスは、死からよみがえられ、その後ずっと生きておられる、とパウロは主張しました。

このことは、信仰者にとってはごく当たり前のことです。すべて主イエスを信じる者、彼について行く者はみな、主が生きておられることを信じているはずで、あなたは、信じておられますか？主が、その死をもってあなたの罪を赦すだけではなく、今日も生きて、ご自身の御霊とみことばをもって、あなたを義の道、主を証する歩みへと導いておられることを信じておられますか？主イエスが、私たち罪人のために十字架にかかり、死んで下さったのは事実です。でも主は、もはや墓の中にはおられない。聖書に書かれてある通り、また弟子たちに前もって語っておられたように、主はよみがえられたのです。そして、今も生きておられます。

黙 1:17-19「それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。『恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、18 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。19 そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ』…。これは、その信仰のゆえに、パトモス島に流されたヨハネが、栄光の主を見て死んだ者のようになった時に、主が彼に語られたことばです。

皆さん、主イエスは生きておられます。この方は、信仰をもってご自分に近づく者に、近づいて下さるので、主は、かつてダマスコ途上でパウロに現れ、彼を回心に導かれた時に、アナニヤを通してこう語っておられました。使 9:15-16「しかし、主はこう言われた。『行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです』」。

主は、パウロにあわれみを示された時、すでに彼を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に、ご自身の名を運ぶ器として選んでおられました。ここに「王たち」とありますが、文字通り、パウロは、王たちの前にも立たされることになるのです。その内容については、また次週見ますが、どうぞ今日の 23 節を見て下さい。「こういうわけで、翌日、アグリッパとベルニケは、大いに威儀を整えて到着し、千人隊長たちや市の首脳者たちにつき添われて講堂に入った。そのとき、フェストの命令によってパウロが連れて来られた」。

ここには、アグリッパ王と彼の妹ベルニケの他に、千人隊長たちや市の首脳者たちも同席したことが記されています。これは主イエスを証するには、またとない機会といえるでしょう。でも、考えて見て下さい。アグリッパ二世が、どのような人であったかはわかりませんが、彼もまたヘロデ家の者であったところからすると、この後のパウロの話の内容次第では、もしかしたらその場でどうにかされていてもおかしくなかったのです。でも、そのような中で、パウロは、主イエスを死なれた方ではなく、生きておられる方として証します。

私たちは苦しみに遭うと、特に主のため、信仰のゆえに、苦しみに遭ってると思うと、積極的に証することができなくなることがあります。でも、パウロは、多くの苦しみを受ける中で、苦しみのそのただ中で、主イエスを、その福音のすばらしさを大胆に証し続けました。なぜですか？それは彼が、この生きておられる方によって日々生かされていたからです。つまり、いつも主と共に歩んでいたからです。主は、あなたの置かれている状況や心の中で考えていることのすべてをご存知です。その上で、あなたを身許に引き寄せ、御霊とみことばによって強め、恵みで満たすことで、ご自分の証人として栄光を現わすことを望んでおられるのです。主イエスは今日も生きておられます。この方に永遠の望みを置く者として、日々、主の御霊とみことばによって生かされようではありませんか。それが私たちをして主を証することとなるからです。